



兒童研究法

文學士 松本孝次郎

嗅覺

此感覺は、何時からあるといふたしかな説はありませぬ、たゞへば、寢て居る兒の鼻の所にははふものを置いて感ぜない、又たま／＼鼻を動かしても、偶然でとにかく實驗しても好結果がありません。クスモール氏も之は研究したけれども分らぬと言はれました。

嗅覺の研究上注意すべき事

香に對する感情を試験するがために、哺乳器の乳房の上に善き香のもの、又は悪しき香のものを置き、之に由て小兒が之を嫌ふや否やを觀察すべし。悪しき香に對して、之を除去せんとするの運動は何時頃より始まるや又睡眠中にもかゝることあるか。

悪しき香のものは、不快なる顔容を呈さしむることなきもなほ小兒をして泣叫せしむることなきか何時頃より明に嗅覺の存することを認め得るか。幼兒は暗室の中にありて單に香の感覺のみによりてその母親と他人とを辨明し得るか。

味覺

胎兒である間は、其養分が母體から直に兒體に入りますから胎兒中には味覺はありませぬ。

クスモール氏は生れたる直に味覺かあるといはれ

ました、けれども他には生れたてにはないといふ人かあります。米國のシン夫人は、キニーチを百分の二の割合に水にどかして、兒に飲ませて砂糖水と同じ様に飲むから、味は分らないのであるといひました。

クスモール氏は砂糖十グラムを水半ランス、キニーチ十グラムを水半ランス、にませて舌の上に乗せると砂糖の時には喜んで、キニーチの時には眉に皺をよせます。これは一は快、一は不快の形である。また味を辯別するのに鋭い兒と、鈍い兒とがあるといはれました。

つまり極幼い時は刺激が弱ければ分らない——強ければ感するのでありませう。

兒が甘い物を好むのは、生理組織が糖分を多く要するのでありませう。これは只人のみでなく山羊

なども同じであります。

味覺の研究上注意すべきこと

最初小兒は甚だ甘き砂糖の溶液と、少しく甘き砂糖の溶液とを差別することはありません。而して何時頃よりしてかゝる差別をなすに至るか。

何時頃よりしてキニーチの溶液又は鹽の溶液の一滴を、舌の上に載せて不快の顔容を呈するや。

甘きものは、常に小兒によりて好まるゝや。何時頃より小兒は砂糖を嘗むるを好むか。

グリスリンの一滴を舌の表面に落とすと、顔面に如何なる表出をなすか。

幼兒が牛乳と水とを混和したものを飲むとを嫌ふ時に、哺乳器の乳房に少しグリスリンを塗りますと、其甘味の爲に乳を吸ふ様になりますか、又はグリスリンのみを嘗め盡して、全く吸収すること

を止むるや。若し後者の場合をあらはすとせば、  
 幼児は既に甘味を差別するとか、出来るものと見  
 做すとか出来ず。

味覺の教育上注意すべきこと

味覺は教育上あまり注意すべきとかわりません。  
 只成べく色々の味の辨別をすることが出来るやう  
 に練習すべきであります。兒の嫌ふものを無理に  
 強ふるのは、よくないことです。又衛生上食物  
 のあまり冷いのは消化を害します。氣をつけなけ  
 ればなりません。

有機感覺

これは氣分のとであります。胃の作用、血液の循  
 環、筋の作用、呼吸作用が完全ならば氣分がよく  
 また少しも故障があれば氣分がわるいものです  
 そうして氣分によつて人の様子に影響を與へます

有機感覺の研究上注意すべきこと

飢渴に迫つた兒童は、他の苦痛に迫つた場合と其  
 泣き聲を異にします。其差別は如何。

何時頃より、幼児は未だ言語を用ひることを知らざ  
 るも、他の方法で飢渴の状態を示すに至るか。

幼児は始め其胃が小ですから、従つて空腹を感する  
 ことか屢々であります。そうして其胃が大きくなる  
 に従つて空腹を感することは遅くなりませす。健全

な新生兒でも其胃は僅に三十五乃至四十三立方セ  
 ンチメートルで二週間を過くると百五十三乃至百  
 六十立方センチメートルに達し、二年の後になる

と七百四十立方センチメートルになるといひます  
 ですから幼児が一度哺乳した時間から次に哺乳を  
 要する時間の間は、次第に長くなる傾向を有して  
 居ります。ですからこの時間の差は果して如何で

しよう。食物を得んとする慾望は、小兒が齒を有するに先立ちて嚙み又は唇を打鳴らす等のことによりて顯はさるゝか。或はこれ等の本能的運動は飢餓の表出と關係なきか。一般に言へば飢へたる小兒は泣き、且つ安靜ならざれども空腹ならざる小兒は泣くことなく、且つ平穩です。そうしてかゝるをば、何時頃よりして其差別を認め得るか。概して空腹でない小兒は他人の指を吸ふことなく唯疲勞せる場合の小兒の泣聲は、空腹或は苦痛のある小兒の泣聲と異るところ如何。小兒が自ら「睡むたい」等の語を用ゐて其疲勞を顯はすは何時頃より始まるか。小兒は何時間程續いて熟眠するか。一日の中幾時間睡眠するか。身邊靜かならざるところにわつても小兒は睡眠を

なすか。明き所にては如何。又乳を飲みつゝある間にては如何。

出生後一週間に於ては、小兒が睡眠して居る間呼吸の數は一分時に何程であるかを計るべし。そうして其後は一週に一回、又其後は一ヶ月に一回つゝ試験し、小兒の年齢と共に如何なる變化があるかを發見すべし。

腹にある兒は反對です。これ等は何時頃よりしてかゝる差別を認むべきか。

空腹な小兒は笑ふとなく、空腹でない小兒は幾分か愉快な表出をします。かゝる事を認め得るは何時頃より始まるか。

小兒が満腹した場合には其哺乳作用を止め、乳房を強く押して、口から之を離します。この本能的運動は、甚だ早くより顯はれます。クロイン氏は

既に出生後第三週間で、かゝる運動をしたものか  
あるといはれました。かゝる舉動は果して何時頃  
より始まるか。

兒童の睡眠するは空腹の時に多きか。將た満腹の  
時におぼさか。特に出生後半年間は注意すべきで  
す。

幼兒は寐床に入つて後何分位で睡眠するか。又年  
齡の増加すると共に如何なる變化あるか。

有機感覺の教育上注意すべきと

有機感覺に最も直接に關係せる大切な事は休息で  
ありませぬ。そうして一番よい休息は睡眠でありま  
す。休息は勢力を回復して貯蓄する良法でありま  
す。人の心臓も一度收縮すれば次に一度休み、後  
またはたらしませます。凡て人の作用は休息とはた  
らきどが交る／＼にくるもので、休まずにはたらく

ばかりでは勢力がつかせてしまひます。そこで自然  
の休息法即ち睡眠は大切なことであります。さて  
其睡眠時間は左に示す丈は是非必要です。

〔四才まで〕〔七才まで〕〔九才まで〕〔十二才まで〕  
〔十四時間〕〔十一時間〕〔十時間半〕〔十時間〕

〔十四才まで〕  
〔九時間乃至十時間〕  
〔廿一才まで〕  
〔九時間〕

十四才以下の兒童は夏よりも冬に多く眠らせなけ  
ればなりません。これは夏よりも冬に多く成長す  
るからであります。睡眠中は安眠させなければな  
りませぬ。寐言を言つたり、突然起き上つたり、  
夢を見たりする様の睡眠は十分に勢力を回復する  
ことが出来ませぬ。従て十分に有機感覺をよくす  
ることは出来ませぬ。なほ、此睡眠の外に運動と  
食物に注意するものが大切であります。